

X 体験の研究 (VI)
——江戸時代の心学における場合、
熊沢蕃山と石田梅岩を主として——

米 沢 弘

Studies in X-Experience
——On the Cases of Shingaku (心学) in Tokugawa Period——

Hiroshi YONEZAWA

This paper examines Shingaku (心学・heart or mind learning) in the Tokugawa period, particularly that by Kumazawa Banzan (熊沢蕃山・1619～1691) and Ishida Baigan (石田梅岩・1689～1744). Shingaku originally meant the Doctrines of Wang Yang-ming (陽明学), and was later referred to Sekimon Shingaku (石門心学・the movements of Shingaku founded by Ishida Baigan). The official learning in the Tokugawa period was the doctrines of Chu Hsi (朱子学) but those of Wang Yang-ming, which were prohibited in Ching Dynasty in China and Yi Dynasty in Korea, were popular here in Japan.

In this paper, I try to look closely into the Shūgi-washo (集義和書) and the Shūgi-gaisho (集義外書), the books by Kumazawa Banzan who represented School of Wang Yang-ming during the early part of the Tokugawa period, from the viewpoint of comparative learnings of Confucianism, Buddhism, Taoism, Christianity and Shintoism. The principle of Banzan's thought in these books was that cultural phenomena would change according to time, place and man's standing. Concerning Ishida Baigan, I inquire into his thought with materials about his process of inner enlightenment.

I also briefly refer to Ōshio Chūsai (大塩中斉・1793～1837), a representative thinker of School of Wang Yang-ming during the latter part of the Tokugawa period, and Sato Issai (佐藤一斉・1772～1859) who was called "half by Chu and half by Wang". During the Tokugawa period, Confucianism was pursued as a guide to live a real life as well as a hope to pin on the world to come, in the age of peace after that of civil strife.

はじめに

形よりして言へば、則ち身は心を
裏み、心は身内に在り。

道よりして観れば、則ち心は身を
裏み、身は心内に在り。

(原漢文)

大塩中斉『洗心洞箴記』から

体験について、心学における場合を考えよう。

「聖人の学は心学なり」とは『陸象山文集』の冒頭の有名な王陽明の言葉だが、江戸時代においては、心学とは陽明学の意味で、つづいては石門心学の意味で、時には朱子学についても言われた。またそのイメージも、プラスの場合もあり、マイナスの場合もあった。

幕末の陽朱陰王と言われた佐藤一斎は『言志晩録』の中で次のように述べている。

世に一種の心學と稱する者有り。女子・小人に於ては寸益無きに非ず。然れども要するに郷愿の類たり。士君子にして此を學べば、則ち流俗に汨み、義氣を失ひ、尤も武弁の宜しき所に非ず。人主誤つて之を用ひば、士氣をして怯懦ならしむ。殆ど不可なり。

(原漢文) 佐藤一斎『言志晩録』から

また一斎と同時代で、いわゆる大塩平八郎の乱で火死する大塩中斉は、『洗心洞筭記』の中で次のように述べている。

顧亭林(清初の学者)心學の弊を矯めんと欲し、終に程子云ふ所の孔門傳授の心法を以て、釋氏の言を借用し、酌むべき無きにあらずと爲す。而て又唐仁卿(明の万歴中の進士)人に答ふる書に謂はゆる、心學の二字は、六經孔孟の道はざる所の語を引いて、以て心學を禪學に竄逐す。是れ其の意を推すに、全く陽明先生良知の學を惡み、而て程子に波及するものなり。嗟夫、冤なるかな。而て亭林獨り心學を厭ふこと此の如しと雖も、古の大儒皆此に由つて賢聖の域に入る、則ち亦奚ぞ疑はんや。後進もし亭林の説に惑ひ、心を廢して以て書を読み理を窮むれば、則ち其の學ぶ所は特に訓詁文字の末のみ、豈聖學ならんや。故に今乃ち試みに大儒の心學の説を擧げて以て之を證し、而て後進の惑を破らん。

(以下略)(原漢文)

大塩中斉『洗心洞筭記』から

言うまでもなく、前者は石門心学について考えており、後者は陽明学について言う。

だが普通に陽明学者とされる人々の場合も、必ずしもプラスの意味としない場合もある。

熊沢蕃山は『集義和書』の中で次のように述べる。

拙者をも世間には心学者と申と承候。初学の時心得そこなひて、みづからまねきたる事に候へども、心学の名目しかるべからず存候。道ならば道、学ならば学にてこそ有べく候へ。いづれと名を付、かたよるはよからず候。漢儒の訓詁ありたればこそ、宋朝に理学もおこり候へ。宋朝の發明によりてこそ、明朝に心法をも説候へ。明朝の論あればこそ、数ならぬ我等ごときも、入徳の受用を心がけ候へ。論議は次第にくはしくなりても、徳は古人に及がたし。後世の者、心は本の凡情ながら、文学の力にて、たまたま先賢の未発の解を得ては、古人の凡情なき有徳をそしり申事、勿体なき義なり。(以下略)

熊沢蕃山『集義和書巻一』から

いわゆる石門心学については、石田梅岩自身は心学という言葉を使っていない。この言葉の使用は手島堵庵以降である。

心学という言葉を広義に用いれば、現代においても、この種の立場は流行している。それはエマーソン流の唯心論や、潜在意識なり深層意識を根據とするもので、一例をあげれば、デール・カーネギーのものや、ジョセフ・マーフィのものなどもまさしくそれである。

現代では、西欧のキリスト教社会では、啓示宗教は少数の人々にだけ支持される傾向は一層強くなっている。キリスト教的信仰の中で、キリスト教に独自の暗号への態度保留と、

その信仰の諸層の中での自然的理性に依據することとなる。もっともこのことは、護教学として自然神学を持つカトリックとプロテスタントで条件は異なる。またこのことは、現代において後期ストア学派が求められることとも共通する。

これと同じ傾向は、時代は異なるが、江戸時代初期に儒学が求められた理由であった。それは単に上からの統治の要請のためだけではなく、長い戦乱の時代が終り、人々は来世に希望をつなぐだけでなく、現世に生きる指針として現世的な儒教ないしは儒学を求めたと言ってよい。

『集義和書・外書』から

熊沢蕃山（元和五年・1619～元禄四年・1691）の著書の中で、江戸時代を通じて最も大きな影響を与えたのは、『集義和書』と『集義外書』である。それは和文で書かれたこととも関係するが、荻牛徂徠の述べるような、当代の最も才能豊かな著者が、思うままに考えを述べたものであったからである。

蕃山は当時としては長命で、爛熟した元禄時代にまで生きた。キリシタンは禁制だったが、未だその記憶の生々しい時代だった。彼の父親は島原の乱の包囲軍に加わっている。蕃山は、仏教、キリスト教、儒教、道教、それに神道も加えて、それらを比較し考察できる時代と立場にあった。

この時代までの、東西文明の並行現象は、しばしば指摘されるが、西欧の同時代の思想家としてはパスカル（1623～1662）やスピノザ（1632～1677）がある。日本では盤珪禪師（元和八年・1622～元禄三年・1690）とは全く同時代で、度会延佳、井原西鶴、松尾芭蕉などは蕃山と相前後して没している。

蕃山の思想を考えるためには、近世日本史の中での最初の安定期としての江戸初期といったものの、社会的・経済的な包括的分析も必要となろうが、今回は、主として蕃山の学

風の特徴を見るにとどまる。

蕃山の著書の中で、最も驚かされる点は、彼が現代のエコロジーの考えをすでに持っていたことで、これは壮年時に岡山藩の治政にたずさわったことも関係しようが、17世紀の思想家としては、洋の東西をとはず、唯一人ではなかったろうか。この考えは『和書』『外書』（以下このように略す）の中でしばしば述べられるが、『大学或問』の中でもまとめて論ぜられている。

はじめにテキストの問題を若干述べてみよう。刊行年次不明の初版本の『和書』があり、その中から公刊をはばかれるものを抜いたのが、同じく刊行時不明の二版本の和書である。このはぶかれたものに追加を加えて刊行されたのが『外書』である。この『外書』の序には「頗る世の忌諱をおかせることあればにや、その徒秘してこれをつたへず」であったものを書肆小山知常が「そのうずもれんことをおそれて」出版したとある。この『外書』とともに出版されたものが三版本の『和書』である。この三版本は、すでに版になって刊行されていたものであろう。それを合せ刊行したのが流布本の『集義和書』『集義外書』であり、『外書』の刊記には宝永六年五月（1709年）とある。

『和書』『外書』については、多くのテキスト上の問題があるが、今回はそれらについての考察は一切省略する。

『和書・外書』の流布本は各16巻で大部なものである。その取扱う範囲は、歴史、政治、軍事、教育、治山・治水、宗教、文化など極めて広い。書簡の問いに返書で答えるもの、また問と答からなるもの、論考や図解など、そのスタイルもさまざまである。

また私どもが漠然と江戸時代の思想家から考えられるものと、問題のとり上げ方がかなり異なる。それは不思議なくらい自由であり、文明史家ないしは文明評論家としての蕃山の

目は時代をこえており、しばしば現代に通ずる。

今回は『和書』『外書』の中の、儒教、仏教、キリシタン、道教、さらに神道について述べる部分を考察するにとどまるが、その際に蕃山は〈時・処(所)・位〉という立場から考えを進める。

はじめに、蕃山の理論的立場をよく示す部分を見ておこう。

来書略。万物一体といひ、草木国土悉皆成仏と云うときは、同じ道理の様に聞え候。

返書略。万物一体とは、天地万物みな太虚の一气より生じたるものなるゆへに、仁者は、一草一木をも、其時なく其理なくてはきらず候。況飛潜動走のものをや。草木にても、つよき日でりなどに、しばむを見ては、我心もしほるゝごとし。雨露のめぐみを得て青やかにさかへぬるを見ては、我心もよろこばし。是一体のしるしなり。しかれども、人は天地の徳・万物の霊といひて、すぐれたる所あり。たとへば、庭前の梅の根の土中にかくれたるは太虚のごとく、一本の木は天地のごとく、枝は国々のごとく、葉は万物のごとく、花実^{はなみ}は人のごとし。葉も花実も一本の木より生ずといへ共、葉には全体の木^もの用なし。数有て朽ぬるばかりなり。花実^{はなみ}はすこしきなりといへども、一本の木の全体を備へし故、地に植ぬれば又大木となりぬ。かくのごとく、万物も同じく太虚の一气より生ずといへども、太虚天地の全体を備ることなし。人は其形すこしきなれ共、太虚の全体ある故に、人の性にのみ明德の尊号あり。故に、人は小体の天にして、天は大体の人といへり。人の一身を天地に合せて、少しもたがふ事なし。(中略)万物一体とはいふべし、一性とは云うべからず。万物は人のために生じたるものなり。我心則太虚なり。天地四海も我心中にあり。人鬼・幽明うたがひなし。堯舜の道は、人倫を

明かにするにあり。故に他の道を学びむことをねがはず。仏法の事は我不識。(『和書・卷一』)

大虚を植物の根にたとえる部分などは、師の中江藤樹(1608~1648)の考えをうける。蕃山は藤樹の時処位の考を学び、またそれにより藤樹をこえている。

藤樹は『翁問答』の「上の末」の問答の中で稲の生育を例として時処位について説明している。蕃山の藤樹の影響は大きい^が、蕃山の考えは藤樹とは同じではなく、とくに晩年の藤樹の考えはとらない。

心友問。先生は、先師中江氏の言を用ひずして、自の是を立給へるは、高慢也と、申者あり。

云。予が先師に受てたがはざるものは実義也。学術言行の未熟なると、時・処・位に应ずるとは、日をかさねて熟し、時に当て変通すべし。予が後の人も、又予が学の未熟を補ひ、予が言行の後の時に、不叶^{かなわざる}をばあらたむべし。大道の実義にをいては、先師と予と一毛もたがふ事あたはず。予が後の人も亦同じ。其変に通じて民人うむことなきの知もひとし。言行跡の不同を見て同異を争ふは道を知ざるなり。(『和書』卷十三)

藤樹も蕃山も、普通に陽明学者と言われるが、陽明学のわく内にはとどまらない。

西欧と中国を比較した場合、アルベルトゥス・マグヌスとトマス・アクィナスは二程子と朱子にあたり、ルター(1483~1546)と王陽明(1472~1528)は、まさしく時代も同じで先行のオントロジー中心の思想への批判者として現われ、実存の問題を取扱う。

時処位の考え方は、現象と本体とを分け、現象の比較の上で、時間的経過や風土論、さらにマックス・ウェーバーの言う階級と身分とを含めた人間の問題などを考えようとする。

また日本では、易簡であることが重要であると説く。(易簡とは易經繫辭伝の話)

時間的経過の弁証法としては、後に**富永仲基**(1715~1746)の**加上**という考えが現われるが、粗い面もあるが他の要素が加わるので、蕃山の時処位の考えの方の適用範囲は広く、その考え方は加上に引きつがれる。

蕃山は時処位の考えに立って、**道と法**とを分けて考える。

道と法とは別なるものにて候を、心得ちがひて、法を道と覺えたるあやまり多く候。

法は中國の聖人といへども代々に替り候。況日本へ移しては、行がたき事多く候。(『外書』卷三)

今の學者の道とし行ふは多は法なり。時處位の至善に叶はざれば道にはあらず。しかのみならず、今の法に泥みたる學者は、仁義をしらず。爭心利害の凡情逞く、只己が氣質の近きが爲に、事を勤め、法を用ひ、經學の文理をいふを以て道者なりとおもへり。(『外書』卷三)

時所(処)位の至善をしらで、たゞに聖賢の跡によるは、聖賢の能狂言をするがごとし。(『外書』卷三)

道は大路のごとしといへり。衆の共によるべきところ也。五倫の五典十義これなり。一文不通の人といへども、その實は學者にまさりたるあり、天にうくる處なればなり。(『外書』卷十)

儒教一般、また陽明学・心学についての考えを見てみよう。

問。先生の論は陽明子の伝に似たり。朱子・王子、格致にをいては黑白のたがひあることはいかゞ。

答。愚は朱子にもとらず、陽明にもとらず、たゞ古の聖人に取て用ひ侍るなり。道統の伝のより來ること、朱・王共に同じ。其言は時によって発する成るべし。其真にをいては符節を合せたるがごとし。又朱・王とても各別にあらず。朱子は時の弊をたむべきがために、理を窮め惑を^{わきまう}弁^{かへ}るの上に重し。自反慎独の功なきにあらず。王子も時の弊によって自反慎独の功に重し。窮理の学なきにあらず。愚拙、自反慎独の功の、内に向て受用と成事は、陽明の良智の發起に取、惑を弁^{かへ}るの事は、朱子窮理の学により侍り。朱・王の世、學者のまどひ異なり。地を易^{かへ}ば同じかるべし。窮理とて事々物々の理と空にいひては人のうたがひあり。たゞ學者の心のまどひある所の事物によつて其理を窮るなり。されば、是は初学の時の事なり。大意心に知得すれば、いまだ不弁不知の事、千万の事物前に來るといへども、まどふべきことなし。異学の、一代、心を尽くす悟りといふものは、聖学にをいては、力おもいれず心をも勞せずして、遊びながら得ことなり。(『和書』卷八)

學者問。心学おこりてより儒学実におもむき、諸儒の思ひ入かはりたり。たゞ儒のみならず、近年禪学のはやり侍ることも、心学に目をさまし教やうよく成たる故なり。扱儒学は日々におとろへ、禪学はいよいよひろがり侍り。しかれば、心学は禪のさきがけとなれり。遠き慮なしとそしり侍る者あり、いかん。

云。しかるにあらず。世は次第に文明になれり。唐にても、初は仏流わかれてひろまり、しかも、他は次第におとろへて、たゞ禪学のみこれり。日本も後はさ様に成行なん。それ人は易簡なる事により易し。一向宗ほど易簡なる立法なければ、これに帰する者多し。浄土・日蓮も、後は一向の易簡に習てひろく成ぬ。近年文明にしたがつて、地獄・極楽等の説を信ずる事うすし。これより後はいよいよさあるべし。禪宗はむつかしき事なく易簡

に教て、しかも悟りとて、さのみ後生の地獄にかゝはらず。これ文明の時にあへり。今の禪は愚夫愚婦のよらん事を欲して妙を云う。これ利心なり。祖師の伝来にそむけり。この事なくばいよいよ盛になりて、他宗は皆をされつべし。(『和書』巻十一と『外書』巻九)

道を見るものは生死を以て心を二にせず、人の身の心の中に生れ出たるは、魚の水中に生じたるがごとし。魚の出来たるために水まさず。魚の死するが故に水減ぜず。死生共に水は常の水なり。其ごとく、此身の生死ともに心は常の心なり。春夏秋冬則我心なり。心の中に此身の生出たるは、大虚の晴天にうき雲の一むら出たるがごとし。死するは其雲のきゆるがごとし。身死すれば此形に付たる情欲の心はなくなる也。氣は今も天地とひとつなり。天にかへるまでもなく、今よりひとつなり。形は今も地上にあり。死すれば土中にうづみて、土とひとつになる道理なり。氣はたとえば水のごとく、身はたとえば舟のごとし。氣の有故に身もうきてありくなり。死は氣と形とはなるゝなり。はなれては地にたをるゝことはりなり。水つきては舟すはるがごとし。氣のあつまりて、人の形をなしたる所には數あるなり。數のつくるところ死と成なり。晝一日うごきはたらけば、動の數きはまりて寝たくなると同じ。數より前にも鼻口をふさぎて息をつむれば、死するは氣とはなるゝ故なり。何の別事もなきに、釋迦といふいたづら者が、いろいろの偽をいひて、多くの人をまどはせたるものなり。此まよひあるによりて、生て明かになきものは、死する時にもまどひて、心安くは得死せざるほどに、生て明らかなるものは、死して安しといひたるなり。生死を昼夜と同じく見て、何心なく死することなり。(『外書』巻九)

「釈迦といういたづらものが」とは改めて述べるまでもなく、一休の狂歌によっている。

一休の影響は、蕃山と同時代の盤珪の道歌にもあり、また後に述べる石田梅岩にも現われている。

蕃山の**仏教**についての考えは当時の儒者としてはきびしい方ではないが、死についての考え方が、儒と仏教やキリシタンとは違うと説く。

來書略、生死は人の常の理なり、しかるに三年の悲哀は甚すぎたるがごとし。貴老は三年の喪をなし給はんか

返書略、古人の悲哀は死をかなしむにあらざり、別をかなしむ也。こゝに行べき義理ありて奥州へ行く人あらば、父兄ともにすすめて行しむべし。しかれども旅立の朝は必ず泪をもよほすべし。これその奥州に行を嘆くにあらず、しばしの別を惜しむなり。死生は天地の理なり、何ぞ死をおしまんや。只一生の別をかなしむなり。(『外書』巻一)

死生は昼夜の道なり、命をおしむべからず、死を哀しむべからずは理なり。然れども別をなげくは人の情なり。(『外書』巻十六)

我仏學せざれども、形容行跡をみて其心をしれり。しばらく吾子がためにこれをいはん。仏學流多しといへども、天台と禪とすぐれたる。天台は高妙なり。仏學のくはしきこと、禪にまされり。しかれども心に惑あり。禪は學あらけれども、ちかく心法に本付て要を得たり。惑なきがごとくなれ共、實はまどへり。問、まどふ所はいかん。云、仏氏の學は死を畏るゝによれり。故に是を云てやまず。禪さとれりといへども、死を畏るゝより悟りを求む。聖學の徒、死生を昼夜とす。常なれば畏るべき所なし。故に死をいはず(『外書』巻八)

むかしの禪は、悟道の機有者ならねば、あ

へしらひもせざりしときく。今の禪は大名富人にてだにあれば、いかやうの惡人にも、悟道^{ベツラ}をゆるし諂^{ベツラ}へり。昔の禪は、後生のまどひをはらしき。今の禪はまどはぬ者をもまどはす也。さとりだにすれば、何をしてもくるしからずといひて、歴々大身の心を亂ぬれば、姪亂^{ヲゴリ}にながれ、奢^{ムナシク}を樂て、百姓を虚^{ムナシク}し、諸士をくるしめ、文武の家業を忘れ、人君の心行なし。是亡國の相なり。如此のあしき教なくては、禪者のかくのごとく多して、時を得と云事はなきこと也。いひわけせよといへば、禪者面を赤くして不言『外書』卷九)

造化輪廻ならば、我又仏と成べし。しかれ共輪廻の理なし。『外書』卷六)

天道は至善也。何の惡ありて、地獄國をなさむや。『外書』卷三)

ではキリシタンについては、蕃山はどのよう^ニに考えているのだろうか。

吉利支丹日本を望こと久し、亂世を待て取ことあるべし。又日本の内にて、吉利支丹のごとくなる佛者あり。大方勢力天下をのむにいたれり。法王などいひて、佛者の天下を取ことも侍るべし。然ば一旦は國俗禽獸のごとく成べく候へども、亂世のみにして安こと侍らじ。しからば己が非を悔て、道をおもふべし。陰極て陽を生ずるの時至るべく候。佛者後世といふ偽を信じ、其まよひの心を本として、吉利支丹もおこり候へば、吉利支丹のひき入は佛法にて侍り。『外書』卷二)

後世と輪廻を立ていふときは、吉利支丹は後生の手だても、仏者よりは上手也。理を云事も、仏道よりはまされり。仏道の力を以て、ふせぐべき事かたし。今の儒法は、天下國家の政道となるべからざれば、終に一流と成て、吉利支丹の爲に失はるべし。『外書』卷十)

北狄は外邪なれば治し易し。吉利支丹は内病なれば治しがたし。此内病の生ずる根本は、人々のまどひと、庶民の困究により。迷とけ困究やまば、根を絶つべし。仏法の後世のすゝめにたよりて、それよりまさる法を作てみちびくなれば、後世のすゝめは吉利支丹のより所也。『和書』卷十一と『外書』卷八)

さらに道家および道教について、は

心友問、世の學者のいへるは、貴老の道學は老莊の道に近し、法は道にあらずと云てより給はず。いにしへの法の今に用べきものあり。其格法の中に、道をのづから禺せり。貴老は聰明の質なるに、異端に落給ふはあたら事也。我學に入ば、世の助となるべき人なりとの事也。答云、まことに過分なるひはん也。今の朱學と哉らんにて、後世に道おとり、天下平治せば何かあらん。れされき道學を任せらるゝ人々あるときけば、予がごとき者なくとも、何か事かけ侍らん。予が見る所非ならば、予一人むなしからんのみ。みづからをしからぬ身也。人何ぞをしまん。予が見る處は、今の王學朱學、格法などいふものは、たゞ一流の學たるべし。後世は今よりも多なるとも、其流に器用なる人のみ集り、禪宗律僧などの世にあるごとくにて、治國平天下の教とはならじ。もし國主世主など。すこし用給はゞ少害あるべし。多用給はゞ大に害あるべし。予が學は格法より見る時は大簡にして、老莊の流に似たり。政教にほどこし、天下に用いる時は水土によるの道ならんか。もし王者あらば、必ず法をとらんか。是ならば大に是ならん、非ならば大に非ならん。其人を待のみ。『外書』卷十)

朋友問て云。江西の學者、感應篇をよみ、又誦經の威儀をつとめたりときく。世人これを笑ふ者あり。まことなるか。

答云。まことなり。細工のしならひにはけづりそこなひおほく、馬の乗ならひには度々落るがごとし。聖賢伝受の心法の師なくて、中江氏初てさまざまに心をねりて試られき。心法の受用にたよりあるべきことは、まづ取て受用してたすけとせり。ふたつのこと全くよしとはおもはれざりしかど、志のきどくなる所あるは誦經の威儀なり、凡習の過惡をこまかに記したるものは感應篇なり。こゝを以て、しばらく用られたり。紙捻して一日の過をむすび、善をなしたることもありき。皆細工初にて、事はよからざりしかども、志はよかりしかば、悔べからず。されど、人倫にをいて如^{かくのことき}此の事あるべからず。志は殊勝^{もちいざる}なれども、異端の流にまがふ故に、我は不用なり。、『和書』巻十)

心友問て云。聖賢も又静坐ありや。

答て云。静坐あり。孔子閑居し給ふ時は、申々如たり、天々如たり。心主なき時は必ず散ず。故に忠信を主とす。これを意を誠にすとも云。人欲の妄は間思雜慮と成ぬ、偽なり。其意を誠にする時は、忠信主と成て天理流行す、空々如たり。故に呼吸の息はいたゞきよりくびすに至り、体ゆるやかに色温なり。是静坐の至なり。心に妄ある時は息喉よりかへる。心誠なる時は臍の本より出。養生の術も亦こゝにあり。是故に養生家には呼吸の息をかぞふることあり。内に主を立れば心ちらず。精神内に守て気血順流するのを初学とす。、『和書』巻九)

「感應篇」とは「太上感應篇」のことで道教の善書(勸善書)とよばれるものである。天仙になるためには1300の善を、地仙になるためには300の善を行はなければならないとする。また養生家とは道教の服氣・吐納などの養生術を行うものをさす。

道教についての知識は、和刻本の『列仙全伝』が慶安三年に刊行されているので、予想

されるより多かったのではないだろうか。

では蕃山の神道についての考えはどうだったのだろうか。

儒道といふは、道のすたれたる名也。大道には名なく定法なし。天地の神道は、時に中して行はれずといふ處なし。たゞ天理の誠のみを立て、事と法とを必とせず。、『外書』巻十)

我は聖學をすれども、儒に着せず。俗學のいやしきをも見たり。朱學・王學等の費へもしり。すべて取べきと思ふ學なし。天地の神道を大道と云、我國には日本の水土によるの神道あり。大道は名なけれ共、我國の道なれば、やむことを得ずとしてとらば、神道をとるべし。、『外書』巻六)

日本の水土によるの神道は、もろこしへも、戎國へも、かす事あたはず、かる事不能。唐土の水土によるの聖教も、又日本にかかる事不能、かすことあたはず。戎國の人心によるの佛教も又しかり。文字器物理學はかるべし、かすべし。天地を父母として生れたる人なれば、中國・日本・戎蠻・北狄の人も、皆兄弟也。父たる天は一大にして二なく。地のかはり腹々の子のごとし。、『外書』巻十六)

藤樹にも蕃山にも神道については二つの意味がある。第1は、よく知られるように神道という言葉の初出と関係するものがある。『周易』巻六の觀の象伝に述べる「天之神道を觀て四時或(たがわ)ず、聖人神道を以て教を設け、而て天下服す」から来る意味である。第2は、それが現実に日本で行なわれた、または行なわれる場合の意味である。

蕃山は『和書』『外書』の中でも日本の神道について述べるが、『大学或問』ではよりまとめ述べているので、関連部分を引用して

おこう。

或問。神道の再興すべき事いかゞ。

云。今世間に神道といへるは、昔の社家の法なり。神道にはあらで神職の人の心用ひの作法なり。それを潤色して、神書とし、神道とす。日本紀を第一とすれども、漸く陰陽・大虚の皮膚をいへるのみ。其外の祓などは、神代上下にも及ばず。日本の神書とすべき書は見えず。唯三種の神器のみ、此国の神書なり。上古は文字もなく、書もなし。心の知・仁・勇を三種の象により示し給へり。(以下略) 『大学或問』から

蕃山にとって、第2意味で神道は理念としては存在するが、それが現実の神典としては示されていないわけである。

富永仲基は『翁の文』の中で「仏道のくせは幻術なり」「儒道のくせは文亂なり」とし「神道のくせは、神祕・祕伝・伝授にて、只物をかくすがそのくせなり」とするが、このことは理念としてのみ存在すること、また祭りという方法論だけが伝えられることとも関係しようか。

仏教についての批判的主張をいくつか引用したが、当代の儒学者としては、蕃山は寛容な立場である。それは時処位によって考える彼の立場によっていよう。いわゆる**三教一致**についての次の意見は、蕃山の立場を最もよく示す。

来書略。仏をそしるは無用の事なり、たゞ己が明德を明かす事をせよ、とうけたまはり候は、尤至極に存候。争なくて居候はゞ、三教一致と申も罪あるまじく候や。

返書略。一致にてもなきものを、一致と虚言可申様もなく候。其上、一致は争の端也。同じ仏道の中にてだに、各の異見を立て相争ひ候。別は別にしてあらそはざれば、いつまでも難なく候。仏者も天地の子なり、我も天

地の子なり。皆兄弟にて候へども、或はみる所の異により、或は世にひかるゝすぎはひによりて、さまざまにわかれ申候。儒といひ仏と云見を立ればこそ、たがひの是非もあれ。何れの見をも忘れて、たゞ兄弟たる親みばかりにて交り候へば、あらそふべき事なく候。こゝに職人の子共兄弟ありて、一人は矢の根かちとなり、一人は具足屋となりたがごとし。矢をとゞむべき、^{ヨロイ}甲をぬくべきの争あらば、東西各別の他人なり。本の兄弟の親しみのみ見時は、職は各別にして、争はあるまじく候。これはすぎはひ故とも可^{もうすべく}申候へども、食物にも兄弟各数奇^{スギ}きらひある事なれば、味をあらそひ候とも、各の口のひく所は一致にはなるまじく候。(『和書』巻一)

蕃山の諸宗教に対する考えを見てきたが、さらにいくつか**興味のある言葉**を引用しよう。

日本は則文字にも日の本とかきて陽國なり。小國なるは陽のわかきなり。故に此國の人は悦び多して哀び少し。祭は吉禮にして悦也。故に日本の人これを好めり。いにしへも祭禮のみ精しかりしゆへに、今にのこりてあるは祭祀なり。(『外書』巻十六)

世はいまだ末世にあらず。今を上代となして、万歳を末世になさんも此方次第にて候。今をよく改れば、中興の上代に成申事也。(『外書』巻二)

最後にもう一つだけ、蕃山が今日風に言えば人間の潜在意識なり深層意識に似た考え方、但し陽明学風に致良知の考えによるものだが、その部分を引用しておこう。

来書略、眞言を授唱て虎狼どくじゃのくちをまぬかれ、魔所をものがれたりといふためし多申傳候。いかゞ

返書略、それは眞言の力にはあらず、不動

心の力なり。生付臆病なる者は、空海が大事の傳授の眞言を教候とも甲斐あるまじく候。生付けなげにて愚痴文盲なる者に、大事の眞言と名付て、草木の聞しらぬ名どもを聲につづけ、をしへ候はず、いか様におそろしき所をも遁れ申べく候。人は万物の靈なる故に、心だにうごかず候へば、何ものも害する事はならぬものにて候。『外書』巻二)

蕃山は『和書・外書』の書かれた意味について、次のように述べる。

愚がかな書も、無學不文字の者の、吉利支丹にまどはされぬほどの益には成べし。天地文明の運と見へ侍れば、百歳の後は文學盛なるべし。かな書などはみる人も侍らじ。たゞ二三十年の間の助とするのみ。今も經傳をみる人のために用なし。やはらげて無學の者のためばかりなり。『外書』巻九)

予が和書は、人情時變をしるに便あらん事を思ふなり。『外書』巻三)

岡山藩を致仕した後、時には幽閉の身ではあったが、蕃山は自由人であった。蕃山の名声は天下に聞えていたが、蕃山は心友はいるが弟子はいないとする。

拙者には弟子と申者は一人もなく候。師に成べき芸一としてなき故にて候。医者^{カサヘ}の医業をならひて一生の身をたつるか、物よみの博學を学て物よみを産業として一生をおくるか、扱は出家などの、其宗門をつぎて寺を持などするは、をのづから師弟の契約なくて不叶事に候。(中略) 医者・出家などのごとくに、師弟の様子はなく候。たゞ、本よりのまじはりにて、志の恩をよろこびおもふのみなり。我等、道德の議論をしてあそび候心友も、又かくのごとし。心友なるが故に、たがひに貴賤をば忘るゝ事に候。全く師と不存^{そんぜず}、弟子に

でもなく候。『和書』巻二)

大部な『和書』『外書』の中から、かざられたテーマについて、ごく一部を引用したにとどまった。江戸時代を通じての影響といった点で、蕃山は忘れることのできない重要な位置にある。

石田梅岩の身体験

『石田梅岩全集』には45首ほどの道歌ないしは和歌が収められているが、その中からいくつかをあげてみよう。

- ・賤ノ女ノイタ・ク桶ノ底ヌケテ
水タマラネバ月モヤトラズ。
- ・生れ子の初声あけし其頃の
こゝろなき身にけふも暮しつ。
- ・父母の戀しく思ふ其時は
身をなてゝしれはたのぬくもり。

これらは、思いつくまゝに引用したものだが、第1のものは一休や盤珪のものを連想させる。第2のものもそれに近い。第3のものは梅岩独特のやさしさが示される。

石田梅岩(貞享2年・1685～延享1年・1744)の悟道については、彼自身が書いた『都鄙問答』や『梅岩語録』、また弟子達によって編まれた『石田先生事蹟』などに書き残されている。重複する部分もあるが、いずれも興味のあるものなので三つとも引用しておこう。

第1は『都鄙問答』巻の一に書かれたものである。

我何方ヲ師家トモ定メズ、一年或ハ半季間巡トイヘドモ、我初心ト愚昧ノ病ヨリ、此ゾト心定ラズ。心ニ合^{カサヘ}ル所モナク年月コレヲ歎シニ、或所ニ隱遁ノ學者アリ。此人ニ出會物語ノ上、心ノ沙汰ニ及シ所、一言ノ上ニテ先ニハ、早速聞取テ、「汝ハ心ヲ知リト思ラ

メド、^{イマダシラズ}未知。學ビシ所雲泥ノ違アリ。心を知ラズシテ聖人ノ書ヲ見ルナラバ、『毫釐ノ差千里ノ謬』ト成ルベシ」ト云ヘリ。然レドモ、我云コト先方ヘ聞ヘザルユヘニ、斯申サル、ト心得テ、幾度モ論議ニ及トイヘドモ、肯フ氣色見ヘズ。我益^{マスマス}ガテンユカズ。或時彼人ノ云、「汝何ノ爲ニ學問致シ候ヤ」。答テ云、「五倫五常ノ道ヲ以テ、我ヨリ以下ノ人ニ教ンコトヲ志」ト云。彼人ノ云、「道ハ道心ト云テ心ナリ。『子曰、溫故而知新、可以爲師矣』。故トハ師ヨリ聞所、新トハ我發明スル所ナリ。發明シテ後ハ學所我ニ在テ、人ニ應ルコト窮ナシ。此ヲ以テ師ト成ベシ。然ルヲ汝心ヲ知ザレバ、自迷居テ、且他モ迷セ^ク度候ヤ。心ハ一身ノ主ナリ。身ノ主ヲ知ザレバ、風來者ニテ宿ナシ同前ナリ。我宿ナクシテ、他ヲ救ント云ハ覺束ナシ」ト云リ。我見識^{アタル}ヲ云ントスレドモ、「卵ヲ以テ大石ニ當」ガ如シ。言句吐コト不能。此ニ於テ茫然トシテ疑ヲ生ズ。實ニ得タルコトハ疑ナキ者ナリ。然ニ疑ノ發ハイマダ得ザルト決定シ、夫ヨリ他事心ニ不入、明暮「如何々々」ト心ヲ盡、身モ勞、日ヲ過コト一年半計ナリ。折節愚母病氣ニ附、廿日餘看病セシニ、其坐ヲ立出ケルガ、其時忽然トシテ疑晴、煙ヲ風ノ散ヨリモ早シ。「堯舜ノ道ハ孝弟而已」。魚ハ水ヲ泳、鳥ハ空ヲ飛。詩云、「鳶飛戾天、魚躍于淵」ト云リ。道ハ「上下ニ^{アキラカ}察ナリ」。何ヲカ疑ハン。人ハ孝悌忠信、此外子細ナキコトヲ會得シテ、二十年來ノ疑ヲ解。コレ文字ノスル所ニアラズ、修行ノスル所ナリ。

曰。其子細ナシト會得セルトハ、如何ナルコトゾ。

答。此會得セシコトハ言ガタシ。然レドモ譬ヲ以テ其趣ヲ語ン。或ハ證文、印判^{ナド}杯ノ類、入用ノ時、器ヲ視共不見、又外ヲ尋レドモ不見、今日モ尋明日モ尋、又餘日モ尋レドモ不見。見ヌニ附疑ヒ起リ、取レハセヌカ、證文ナドハ、反古ニマギレテ遣ハセヌカ、落ハセヌカト、種々ニ疑ヲコルモノナリ。餘リ見ネ

バ最早是非ナシト思ヒ、他ノ用事アツテ取マギレ居トキ、忽然ト思ヒ出コトアリ。思ヒ出ハ、コレモ文學ノ及バザル所ナリ。其時ニコソ、前ニ盜レヤセン、落ヤセント思ヒシ疑モ、忽ニ晴^{ハル}ナリ。心ヲ知モ其如ク、闇夜ノ忽ニ明、天照然トシテ明カナルガ如シ。

『都鄙問答』から

次は『石田先生事蹟』からの引用である。

先生三十五六歳の頃まで、性を知れりと定めゐたまひしに、何となく其性に疑ひおこり、是を正さんとて、かなたこなたと師を求めたまへども、何方にても師とすべき人なしとて、年月を歴給ひしに、了雲老師にまみえ給ひ、性の論に及び、先生みづからの見識を言はんとしたまふに、卵をもって大石にあたるがごとく、言句を出し給ふことあたはず、爰において悦服し、師として事へ給へり。其後は日夜他事なく、いかんいかと心を盡し、工夫し給ふ事、壹年半も過ぎける頃、母病ひに臥給ふ故、故郷へ行きたまへり。其時先生四十歳ばかりなり。正月上旬の事なりけるが、母の看病し居たまひしに、用事ありて扉を出でたまふとき、忽然として年來のうたがひ散じ、堯舜の道は孝弟のみ、^{あきらか}鵜は水を泳り、鳥は空を飛ぶ、道は上下に^{あきらか}察なり。性は是天地萬物の親と知り、大いに喜びをなし給へり。其後都にのぼり師にまみえたまひ、禮終りて、師工夫熟せるやと問ひたまふ。先生對ふるに、如是如是といひて、きせるにて空を打ちたまひければ、師曰く、汝が見たる所は、有べかりのしれたる事なり、盲人象を見たる譬のごとく、あるひは尾を見、あるひは足をみるといへども、全體を見ることあたはず、汝我性は天地萬物の親と見たる所の目が残りあり、性は目なしにてこそあれ、其目を今一度はなれきたれとありければ、先生それより又日夜寢食を忘れ、工夫したまふ事、一年餘を経て、ある夜深更におよび、身つかれ臥したまひ、

夜の明けしをもしらず、臥し給ひしに、雀のなく聲きこえける。其時腹中は大海の静々たるごとく、また晴天の如し。其雀の啼ける聲は、大海の静々たるに、鵜が水を分けて入るがごとくに覺えて、それより自性見識の目を離れ給ひしとなり。

『石田先生事蹟』から

この部分については、会席での問いに答えたものとして、**自筆のもの**がある。

問。自性大ナル事如何。

天ノ原生デ野原ノ嫁取レバ生出ス孫子我レ^{ヤシナフ}ト育^{オモン}。

ツラツラ^{オモン}以見レバ、吾レ道ニ志スト云ヘドモ他ニ勝タル愚知ナレバ四十ノコロマデハ道ト云フ物ハ如何ナル物ト^{クテヨコ}直横ノヤウスヲモ知ラズ。或時古郷ニ在シ時、正月上旬ニ用事ニツキ門ニ出ルコト有シニ忽然トシテ開ク。其ノ時アヲギ見レバ鳥ハ空ヲ飛び、フシテ見レバ魚ハ淵ニ躍ル。自身ハ是レハダカ虫、自性ハ是レ天地萬物ノ親ト知り、喜悅誠ニ大ナリ。

天ノ原生シ親マデ吞盡シ自讃ナガラモ廣キ心ゾ

夫レヨリ都ニ上、師ノ方ヘ往、拜禮ヲナシテ事終リヌ。師問テ曰く、イマダ見識替ルコト無シヤ、否ヤ。吾レ答テ云ヤウハ、如是如是ト云テキセルヲ以テ虚空ヲ打。師云、汝ガ見タル處ハ有ベカ、リノ知レタコト也。譬ヘヲ以テ云ハン。佛説ニ盲人ノ象ヲ見タルガ如クニテ、或ハ鼻ヲ見、或ハ足ヲ見、或ハ尾ヲ見ルト云ヘドモ、全軀ヲ見ルコトアタハズ。自性ハ萬物ノ親ト見タル處ノ目が残り有り。自性ト云フ物目ナシニテコソ有レ、其ノ目ヲ今一度離レ來レト云フ。夫レヨリシテ又晝夜枕ヲクダキ工夫シ侍リシニ、或時ニ夜半ニ成テ^{クダレ}草臥フシケルガ、夜モ明ケケレドモ、夫レヲモ知ラズ臥シ居タルニ、後ノ森ニテ雀鳴聲聞ケバ、我ガ腹ノ中ハ大海ノ中ノ静々タルニ似テ如青天。其時雀ノ聲ハ大海ノ静々ト波ノ静

ナル處ニ、鵜ノ鳥ガ水ヲ分テ入ルガ如シ。コ、ニ於テ忽然トシテ自性見識ノ見ヲ離レ得タリ。

吞盡ス心モ今ハ白玉ノ^{アカゴ}赤子トナリテホギヤノ^{コエ}一音

夫ヨリシテ後ハ自性ハ大ナルコトモ萬物ノ親ト云コトモ思ハズ、迷ウタトモ思ハネバ亦タ覺メタトモ思ハズ。飢テハ食ヲクライ、カツシテハ水ヲ吞ミ、春ハ霞ニコモル華ヲ見、夏ハ晴ユク空ニ青々タル緑ヲ詠メ、暑氣甚シケレバ水ヲ樂ミ、稻葉ノ露ニ月ヲシタヒ、萩ノ下葉色ヅクヨリ紅葉ノ氣色ヲ詠メ、木ノ葉ニカ、ルウス霜ヨリ變リ變リテ雪トナル。實ニ一念ニ移リ往ク其有様ヲ觀ズレバ如何様赤子トモ云ツベシ。自性ノ大ナルコトヲ問ルルト云ヘドモ大小ノ二ツニ心無レバ云フベキ事ハ尚知ラズ。

春霞衣替ナル夏山モ紅葉ハチリテ雪ハフリツ、

正月廿三日會

梅 岩

『石田先生語録』から

梅岩は己れの体験に並々ならぬ確信を持っていた。このことは『石田先生事蹟』の中に「……師病重り、終らんとしたまふ時、師曰く、自註を加へし書どもを、授与ふべしとありければ、先生ほしからずと答へたまふ。師曰く、いかがしてほしからぬぞと問給ふに、先生對へて、われ事にあたれば、新に述ぶるなりとのたまひければ、師大いに歎美したまひしとなり」と書かれている。

師とは先の引用に出る小栗了雲のことである。了雲について、『石田先生事蹟』の附録に手島堵は次のように記す。

「了雲老師、姓は平、族は小栗、名は正順、了雲と号し、一に海容軒と稱す。某候の大夫たり。故ありて致仕して京師に隠れ居玉ふ。嘗て性理の蘊奥を究め、且つ釋老の学に通じ、生徒に教授し玉へり。享保十四年巳酉冬十月十九日、卒し玉ふ。享年六十歳。平安京極四

條の衛、永養寺に葬ると云ふ。」

なお、著者不明の『莫妄想』は小栗了雲によるもの、もしかすると了雲と梅岩の対話か、またはそれに先行するもので答者は了雲と考えることも可能であろう。小栗了雲は黄檗宗の禪を修めた居士と考えられている。黄檗禪は承応三年（1654年）日本にもたらされたが、それがもたらした明代文化の刺激が、新しい町人の倫理を説く梅岩を生む機縁に、幾分でもなっているか否かは今後の課題として問題にすべき点であろう。このことは黄檗の僧であった鉄眼の活躍とも、その誘因は共通するのかも知れない。

『都鄙問答』の中で、或る禪僧が十五年ほど座禪をしたがまだ見性できないのに、心易く自性を知ったと言うのは、「紛レ者ニ違ハナシ」と言ったというのに対して、梅岩は「汝物語ノ僧ハ、未徹ノ僧ナレバ云ニ不足。」と一言の下にしりぞけていることから知られる。さらにつづけて「信心不及ノ所ヨリ、無益ノコト二十五年ノ間、精神ヲ費ハ惜哉」と述べている。

またこのことは、同じく『都鄙問答』の中の次の問答からも知られる。

曰。天人ハートハ聞ドモ、我モ天地ト一致ナルコト落著シガタシ。汝ハ此理ヲ知レリヤ。會テ不得心ノコトハイハレマジキガ、如何ナルコトゾヤ。

答。書經大誓ニ曰、「天視自我民視。天聽自我民聽」トアリ。天ノ心ハ人ナリ。人ノ心ハ天ナリ。此故ニ古今ニ通テナリ。汝今物語ノ相手ハ誰ゾヤ。

曰。對シテイフハ汝ナリ。

答。我ハ萬物ノ一ナリ。萬物ハ天ヨリ生ル子ナリ。汝萬物ニ對セズシテ、何ニヨツテ心ヲ生ズベキヤ。是萬物ハ心ナル所ナリ。寒來レバ身屈シ、暑來レバ身伸、寒暑ハ直ニ心ナリ。熟シテ工夫アルベシ。

曰。段々ノ説ニテ、天人一致ト性善ノコト

ハ、耳ニハ聞ドモ心ニハ得ズシテ、少シモ面白味ヒノ不出ハ、如何ナルコトゾヤ。

答。能問哉。徒然草ニ、「傳聞學^{カクノコトク}ンデ知ルハ眞ノ知ニアラズ」ト云。今汝如斯キコヘタルヨウニ思ハル、トモ、未實知ニアラズ。是ヲ以テ味ナシ。性ヲ知りタシト修行スル者ハ、得ザル所ヲ苦ミ、「是ハイカニコレハ如何ニ」ト、日夜朝暮ニ^{クルシム}困ウチニ、忽然トシテ開タル。其時ノ嬉サヲ^{ヨキトヒカサ}喻テイハバ、死タル親ノ蘇生、再び來り玉フトモ其樂ニモ劣マジ。昔ヨリ重荷ヲ持シ山賤ノ息杖懸テ休タルヲ、安樂ノ至極ナリト畫傳シ。其人ハ豁然ト開タル此樂ヲ不知者ニテ有ツラン。我ニ至極ノ樂ヲ畫ト望人アラバ、豁然トヒラケツ、手ノ舞足ノ蹈所ヲ忘シ者ヲ畫ベシ。此所ヲ傳曰、「豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到」ト。扱コノ所ハ、我心ヲ盡ホドホドニ嬉サチガフナリ。年久シク如何如何ト思フ所ヨリ、忽然トシテ疑ヒ晴ルコトアリ。然ルニ一ケ月ヤ二ケ月ニ疑ヒヲ起シ、是ニ於テモ彷彿ト開クコトアリトイヘドモ、喜コト少シ。少キユヘニ勇氣出ズ。又信心堅固ニシテ入立時ハ、假令辻ニ立テナリトモ、此味ヒヲ世ニ傳ヘ殘サント思フ勇氣モ出ルナリ。我文學ノ拙キ恥ヲ知ラズシテ、如斯謂散スハ、實ニ鄙夫トイフベケレド、我志ヲ述ンタメナリ。

『都鄙問答』から

梅岩の人柄については、後に江戸に心学を伝えた慈恩尼兼葭（1716～1778）の『道得問答』の己れの開悟のプロセスを述べる部分が最も意をつくしているのも、その一部を引用しておこう。

ある人來りて、『堺町六角通下る所に、石田勘平と申す儒者あり。世上稀人にて、無縁の講釋し、人を正道に導き給ふ人なり。』といふ。我これによつて、まゐりて見れば、朝講は、論語等、夜講には、山姥の謡のかうしやく、至つて有難き意味合、中々窺がたき所

あり。常ならぬ人の様に思ひ、近附になり、打入つて、行跡の様子を窺ひ見れば、いかなる大聖、賢人も此上は在るまじくとぞんじ、此人にたより、教により、修行し見れども、我等ふつゝかにして、中々、これぞと落着しがたし。

我思ふは、是程徳のそなはりたる仁、何國にあるべくや。此所にて取得ずんば、一生自性を得る事、あるまじくとおもひ、堺町姉が小路上る町木村平助と申す人、其節、石田先生の門弟也。此座敷を取仕切り是にて修行いたすべきよし、平助夫婦もろ共、進め申すにまかせ、二畳半のざしきに取籠り食を断ち、はんぎりに水をくませ、晝夜、水をあび、工夫いたし、心を盡し候所、身もつかれ、ばうぜんとして居たるとき、そよそよと吹來る風に、思はず我身を驚かす所にて、古今變滅にあづからず、全體そのまゝの我なる事を、ほうほつと知る所あり、在難き事も、面白き事も、此上なき事、決定せり。大高恩の父母は我身にそうて、諸共に守の神と成りたまふ、親の心を、眼前に拜する事のありがたさは、骨髓に徹しけり。

一心の門を開けば、法界の草木國土、佛といふも面白く、柳はみどり、花は紅、おのれおのれが法をとく、實に面白き、天の氣しきかな。信心堅固に、修行の功積りて、忽然とひらくことあらば、暗夜の忽に明け、一天照然として、明かなるがごとし。

『道得問答』 卷一から)

すでに石川謙氏が『石門心学史の研究』の中で述べるように、梅岩は蕃山の『集義和書』に親しんでおり、その立場には共通するものがある。

蕃山は『源氏物語』に親しみ、神道についても先に引用したように述べているが、梅岩は『和論語』と『徒然草』を重視する。

『石田先生事蹟』によれば「常に説き給ふ書は、四書、孝經、小学、易經、詩經、大極図

說、近思錄、性理字義、老子、莊子、和論語、徒然草等」であつた。

『和論語』の神明部へのキリシタンの影響については、本研究(Ⅰ)ですでに述べたが、これも『心学五倫書』の天道の場合と同じように(その説明は省略したが)、キリシタンの教義に接してその内包をより豊かにしたと言えよう。このことは内清浄についてとくに言われよう。

梅岩は若い頃には神道の伝道を志し、「若聞人なくば鈴を振り町々を廻りて成とも、人の人たる道を勧めたし」と願つたことが『石田先生事蹟』に記されている。

『都鄙問答』出版後、それを讀んで梅岩を訪ねた熊本六所明神の神官・行藤保之がはじめて梅岩を訪ねた時の記録が『石田先生語録』に記されているので、その一部を引用しておこう。この部分は『石田先生事蹟』にも引用されている。

行藤氏問曰、心ト性ト異リヤ。

先生曰、心トイヘバ性情ヲ兼、動靜體用アリ。性トイヘバ體ニテ靜ナリ。心ハ動テ用ナリ。心ノ體ヲ以テイハ、性ニ似タル所アリ。心ノ體ハウツルマデニテ無心ナリ。性モ亦無心ナリ。心ハ氣ニ屬シ、性ハ理ニ屬ス。理ハ萬物ノ中ニコモリ顯ル、コトナシ。心ハ顯レテ物ヲウツス。又人ヨリ云トキハ氣ハ先ニシテ性ハ後ナリ。天地ノ理ヨリ云トキハ理アツテ後ニ氣ヲ生ズ。全體ヲ以テ云トキハ理一物ナリ。理ノ萬物ノ中にアツテ顯レザルコトヲ譬テイハ、道元和尚ノ歌ニ、世ノ中ヲ何ニタトヘン水鳥ノハシフル露ニヤドル月カゲ、如是其ハシフル露ノ飛カフ微塵ノ中ツデモ咸ク月カゲノウツル如ク、理ハ見ヘズトイヘ共、中ニソナハルヲ以テ知ラルベシ。我性ヲ覺悟シテ見レバ神ラシキモノモナク、大極又佛ラシキモノモナシ。因テ此性ヲ會得スレバ儒老莊佛、百家衆伎トイヘ共、皆、我神國ノ末社ニアラズト云コトナシ。或書ニ曰、日本一面ノ神國

トイハバ廣フシテ狭シ。微塵ノ中ニモ神國アリトイハバ狭クシテ廣シ。

行藤氏喜意諾ス、彼歌ヲ寫ス。(以下略)

『石田先生語録』から

梅岩の神道についての考えは、唯一神道の影響を受けているといわれるが、必ずしも明らかではない。また蕃山の影響を大きく受ける。

梅岩の書いたものを、門人の手島堵庵や、さらに後継者の心学道話と比較すると、その体験の確かさに大きな違いが感ぜられる。

石門心学については、さらに多くのこと、とくに鎌田柳泓^{かへはし}について、『心学奥の棧』の中の感応についての説明や、儒教における神の問題を考える際の彼独特の〈空語〉といった言葉についても述べてみたかったが省略せざるを得ない。なお柳泓の『道のこだま』は、心学のカテキズムとも言えるもので、現代にまでも通ずる日本人の特徴を過不足なく示す。

『洗心洞割記』と『言志四録』から

大塩平八郎の乱で知られる、幕末の著名な陽明学者・大塩中斉(寛政七年・1795～天保八年・1837)の『洗心洞筭記』と、中斉より先輩でお互いに文通のあった佐藤一斉(安永元年・1772～安政六年・1859)の『言志四録』から、本稿に関係のあるいくつかの部分引用しておこう。なお一斉は幕府の儒官であったが陽明学に詳しく陽朱陰王と言われた。

中斉の『洗心洞割記』の冒頭の二節は次のごとくである。

天は特に上に在る蒼蒼たる太虚のみならざるなり。石間の虚、竹中の虚と雖も、亦た天なり。況んや老子云ふ所の谷神をや。谷神とは人心なり。故に人心の妙天と同じ。聖人に於て驗すべし。常人は則ち虚を失ふ、焉んぞ之を語るに足らんや。(原漢文)

軀殻外の虚は便ち是れ天なり。天は吾が心なり。心は萬有を葆含^{ほうがん}すること、是に於て悟るべし。故に血氣ある者は、草木瓦石に至るまで、其の死を視、其の摧折を視、其の毀壞を視れば、則ち吾が心を感じ傷せしむ。本と心中の物たるを以ての故なり。若し先づ慾あつて心を塞^{ふさ}げば、則ち心虚にあらず。虚にあざれば、則ち頑然たる一小物にして、而て天體にあらざるなり。便ち骨肉と既に分隔したる、何ぞ況其の他をや。之を名づくるに小人を以てす、亦た理ならずや。(原漢文)

『洗心洞筭記』から

この大虚についての考えは、張子の『正蒙』や王陽明の『伝習録』の言葉を受けるが、直接的には、蕃山の考え(蕃山の理論的考えを示すものとして引用したもの)を受けていることに気づかれよう。

佐藤一斉の『言志録』は40歳代はじめから十一年間ほどに、『言志後録』は50歳代の後半から10年間ほどの間に、『言志晩録』は60歳代の終りから12年間ほどの間に、『言志耄録』は79歳から書かれた。そこには当然のことながら内的深化があろうが、同時に高齢化の著しい現代にとって、今迄は余り注意されなかったアドバイスが見出される。(とくに『言志耄録』の後半部分に)

今回は、一斉の内的観照や感応についての記述だけを引用するにとどまる。

深夜闇室に獨坐すれば、群動皆息み、形影俱に泯ぶ。是に於て反觀すれば、但々方寸の内^{けいぜん}炯然として自ら照す者有るを覺え、恰も一點の燈火闇室を照破するが如し。認め得たり此れ正に是れ我が神光靈昭の本體を。性命は即ち此の物、道德は即ち此の物、中和位育に至るも、亦只々是れ此の物の光輝、宇宙に充塞する處なり。(原漢文) 『言志録』から

物・我の一體たるは、須らく感應の上に就いて之を認むべし。淺深有り。厚薄有り。自ら誣ふ可からず。察せざる可からず。

(原漢文) 『言志晩録』から

書室の中、机硯書冊より以外、凡そ平生使用する所の物件、知覺無しと雖も、而も皆感應有り。宜しく之を撫愛して、或は毀損すること莫かるべし。是れ亦愼徳の一なり。

(原漢文) 『言志晩録』から

端坐して内省し、心の工夫を做すには、宜しく先づ自ら其の主宰を認むべきなり。省する者は我れか。省せらるる者は我れか。心は固と我れにして、軀も亦我れなるに、此の言を爲す者は果して誰か。是れを之れ自省と謂ふ。自省の極は、乃ち靈光の眞の我れたるを見る。(原漢文) 『言志毫録』から

『言志四録』は、幕末から明治にかけて、武士の修養書として広く読まれた。西郷隆盛が、その中から百一則を手抄し、己れの修養に資したことはよく知られている。

一斉の『伝習録欄外書』は三輪執斉の『標注伝習録』とともに、日本人の手になる重要な『伝習録』注解書である。体験重視の一斉の立場は、幕府の儒官でありながら、陽朱陰王とよばれた由縁であり、またこのことは、朱子学以外が禁ぜられた清朝や李子朝鮮の場合とは異なる、江戸時代の特徴でもある。

なお一斉は87歳という当時としては極めて長命であった。没年の安政六年には吉田松陰が刑死し、また坪内逍遙が生れており、まさしく江戸時代の終りを代表する儒家であった。

江戸時代の日本人の手になる儒学の著書は、多くは漢文で書かれているため、ギリシヤやローマの古典よりも(たいていは翻訳で読まれるので)なじみが薄くなっているが、蕃山の言う時処位の少なくとも処位と、また相当程

度に時にも相応するので、現代人にプラスする所は大きい。このことは、はじめにもふれたが、エピクテートスなりマルクス・アウレリウスなどの後期ストア派が、啓示的宗教を受けいれにくい現代人に歓迎されるのと同様である。

おわりに

「 x 体験の研究・心学における場合」という大きなテーマをかゝげながら、熊沢蕃山の『集義和書・外書』についての時処位から見た若干の説明と、石田梅岩については開悟の体験についての記述の引用にとどまった。

心学といっても、陽明学と石門心学という、関係はあるが異質なものについて述べたので、(梅岩自身は蕃山の影響をかなり受けているが)2回に分けるべきであったろうか。

たゞ文教大学では、明年度(1990年)4月から新たに国際学部が設けられ、筆者もそちらへ移るので、 x 体験の研究シリーズも今回で終了することとなる。このシリーズでは、原資料の提供を主としたので説明はほとんど省略した。他日、解説を加え公刊する機会を得たいと考えている。新学部の紀要では、個別的テーマについて考察をつづけたい。

使用テキスト一覧

- I 『和論語』十卷、寛文九年版、筆者所持のものはその新刷。活字本は勝部真長『「和論語」の研究』至文堂、1970年刊、この中には解説とともに全文が収められている。
- II 『翁問答』については各種の活字本がある。『藤樹先生全集・第Ⅲ冊』藤樹神社創立協賛会編纂、1928年刊には慶安2年本と3年本とを上下に対照して印刷している。岩波文庫『翁問答』1936年刊は慶安三年版『日本思想大系29・中江藤樹』岩波書店、1974年刊は同じく慶安三年版による。一般に慶安

三年版が最もよいとされる。なお筆者所持のものは慶安四年版で、同版は三年版に基づく。なお『日本思想大系29』の中の説明に、四年版に「改正篇」が付されていないように書いてあるのは誤りである。その他に有朋堂文庫『中江藤樹文集』1914年刊に所収のものなど。

- Ⅲ 『集義和書』『集義外書』については、『熊沢蕃山全集』蕃山全集刊行会1940～1943、の1巻と2巻に収められている。1巻所載の『和書』は初版と二版が上下に印刷されている（『和書・外書』についてのリプリントは『日本教育思想大系・熊沢蕃山』（上下）、日本図書センター、1979年に所収）。筆者所持のものは流布本・『集義和書・外書』各16巻、各5冊、計10冊の新刷。流布本・三版本の『和書』巻三の返書略の冒頭に「太虚は理のみ也。いへばたゞ一気なり。理は氣の徳なり。」とあるのに対して、初版本、二版本では「理氣のみなり。（以下同文）」とするのに注意。全集本は第二次大戦中の出版で天皇関係の記事にカットや伏字が多い。伏字のない全集の刊行が待たれる。『和書』のみは多数あり、有朋堂文庫、1913年刊や『日本思想大系30・熊沢蕃山』1971年刊などがある。後者には『外書』はないが、二版本ではぶかれた初版本の部分が収められる。また『大学或問』は上記の日本図書センターのリプリント本および上記『岩波・日本思想大系』にも収められている。

- Ⅳ 『都鄙問答』については、『石田梅岩全集』（上下）清文堂出版、1972年改訂再版の上に所収、本文は元文四年版により、欄外に書入本からの書入をかゝげる。筆者所持のものは天明八年

再刻本の新刷。

活字本としては岩波文庫『都鄙問答』1935年刊。『日本文学大系97・近代思想家文集』岩波書店、1966年刊のものなど。

『石田先生語録』は原本と影寫本（自筆原本の上に薄紙を直接あてて書寫したもの）が残されており、全集本は後者によっている。『石田先生事蹟』は上記全集本等に所収。『日本思想大系42・石門心学』岩波書店、1971年刊には「語録」（抄）が載せられている。慈恩尼兼葭の『道得問答』（四巻）、天明九年刊は、加藤咄堂監修『心学道話全集』（全六巻）忠誠堂刊の第五巻、1928年刊によった。この全集本には、上記『石田先生事蹟』ほか主要な心学道話が多数収められている。

- Ⅶ 『洗心洞剖記』は天保六年刊による。筆者の所持のものはその新刷。同書には「附録抄」が付され、佐藤一斉から大塩中斉への書簡などが収められている。この附録抄の中斉の事跡についての部分に伏字が多い。幕府の治政に関する部分である。

活字本としては『洗心洞剖記』（岩波文庫）1940年刊、また『日本思想大系・46、佐藤一斉・大塩中斉』岩波書店・1980年刊がある。同書には「附録抄」はない。

- Ⅷ 『言志四録』については、筆者所持のものは『言志録』文政七年刊、『言志後録』弘化三年刊、『言志晩録』嘉永三年刊、『言志毫録』嘉永七年刊。活字本は多いが『言志四録』（岩波文庫）1935年刊、上記の『日本思想大系・46』所収のものなど多数がある。

- Ⅸ しばしば参考とした石川謙著『石門心学史の研究』は岩波書店、1928年刊。